

骨と足踏み

フミコフミオ

俺が今の仕事についたのは他に選択の余地がなかったからだ。嘘だと思うなら日曜に早起きして新聞に折り込まれている求人広告をぎつりと眺めてみればいい。紙面の半分、多いときには七割を占めているのが俺の仕事、ヘルパー。救いが必要なのは俺の方なのに皮肉と言う他にない。

ヘルパーという仕事は本来、人の役に立つ素晴らしいものだ。だが仕事というものには、情熱や目標を持つて従事している人間と、俺のように「仕方なく」食べるためここにきている人間の二種類がいるものだ。俺の仕事で顕著なのは、俺のようなスタンスの人間が思いのほか存在していることではなく、まともなヘルパーの情熱が時間とともに無くなつていってしまうことだ。これは悲劇と言っている。

施設の裏にある喫煙ルームで介護している老人達をネタに笑いながら盛り上がっている二人のクソ、甲田來未

信と原貞男もしかしたらかつては「まともな」ヘルパーだったのかもしれない。疲弊と消耗の果てにクソに堕ちたのかもしれない。長くここに入っている老人たちの甲田と原への様子から推察するかぎり、その可能性は高い。と俺は考えている。

最低な奴が集まる場所が最低なのではない。マトモなやつが最低な奴になつていくのが最低なのでもない。本当の最低は、そういう現実には指を咥えていることしか出来ないことだ。老人の代理人として甲田と原のハゲグチコンビを殴りながら俺は俺自身が最低になつていくのを実感する。老人を殴る甲田や原と俺は本質的には同じだ。最低。

そんなある日、俺の地図アプリのアップデートの通知が届く。猫も杓子もスマートフォンのご時勢だ。今回は、まるで別物に変わる、といつていいほどのアップデートになるらしい。現バージョンに思い入れがあるわけもなく、アップデート。新しくなった地図を起動してみる。

目的地に、意味も目的もなく、ふざけてお気に入りのテレビプログラムのタイトルを入力。検索。あるはずのない場所が小さなモニターに浮かんだ。「スマイルプリキュア駅」。不具合な俺にびつたりの、不具合が弾き出した場所。

（続く）